

「利他に生きるということ」

銀座中央治療室 木村仁院長 取材レポート

2008 年 9 月

むつう整体という独自の治療方法で、多くの人々を心身共に癒し続ける、銀座中央治療室の院長、木村仁先生。木村先生が開発されたアディオ・イフは、波動共鳴プレスレットとして弊社でも好評の商品ですが、私どもの商品紹介ページを読むだけでは何がなんだかさっぱり分からない・・・という方がほとんどだと思います。今回は、アディオ・イフの誕生秘話から始まり、木村先生が目指すこれからの治療の姿を紹介させていただきます。サイトには掲載できない丸秘のコンテンツばかりです。どうぞ最後まで、ごゆっくりとお楽しみ下さい。

山下：

26 歳くらいで治療家になられた木村先生ですが、それ以前から、人々を癒すということに関心をお持ちだったのでしょうか？

木村先生：

癒すというわけではありませんが、健康については興味を持っていましたね。高校生の頃から「菜食健康法」といった著書などを読みあさっていましたね。中山式快癒器なども試してみたりしてね。

山下：

当時はまだ世間一般的に、健康に対する関心度は低かったのではないですか？何かきっかけがあったのでしょうか。

木村先生：

自分はずっと健康でしたし、具体的なきっかけは思い出せないのですが、おそらく、友人が若くして病気で亡くなったことが影響したのでしょうね。高校生の時、日赤におられた「血液博士」の森下敬一さんが書かれた新聞記事に、「今の高校生の血液はドロドロだ」とあったんです。非常に興味をもって、森下さんを訪ねていったこともあります。

高校は普通科でしたが、元々生物学が好きだったんでしょうね。呼吸・循環・酸化還元といった、人体の仕組みのようなテーマが特に。

山下：

では、高校卒業後はその道へ？

木村先生：

大学は受かったんですが、経済的な事情で進学を断念して、就職先を探しました。入社したのは、第一志望だった某製薬会社だったのですが、人事部配属になってしまい、大阪に行かされました。社内では様々な話を聞かされて、その結果、オルタナティブメディスン（代替医療）に目がいくようになったんです。内部は驚くようなことばかりでしたよ。製薬会社の重役の方々が、漢方薬を飲んでいたり、鍼治療していたり……。あれ？と首を傾げてしまいました。

寮に入って、薬学部出身の先輩たちからも、「自社の薬のことわかんないだろ？」と、いろいろ聞かせてもらったから、それがまた「へえー！」と声を上げるようなとんでもない話ばかり。なにせ、ひとつ新しい抗生物質を発明すれば何年も会社が安泰といった世界です。ダイナミックではありましたが、医療という観点から考えると、何かおかしい。自分が考えていたこととあまりにも違うので、入社してすぐに辞めてしまったんです。

山下：

同じジレンマを抱えながら勤めている方々もいらっしゃるんですよね？

木村先生：

結構いましたよ。社会のためにと想着就職したのに、利益追求以外の何ものでもない。だってね、本当に効く薬を作ってしまったら自社の首を絞めることになるんですよ。そういう社会だと先輩は言っていました。

そんな中で、私は 20 歳でこの製薬会社を辞めて、アルバイトで雑多な仕事をいろいろとこなしました。そして、生命保険のセールスをやっているときに、鍼治療と出会ったんです。すごいものだなと思って、見よう見まねで自分もやってみるようになったんですね。実際に、自分の親兄弟に鍼をやってみるとこれが結構治るんです。これは面白いなと思いましたね。25 歳の時でしたが、セールスはすっかりおろそかになってしまって、来る人来る人に鍼を打ちまくりましたよ。

山下：

完全に我流ですよ？？打つ場所が分かるんですか？

木村先生：

子供のころから、とがった物には何か感じる傾向がありましてね。チャンバラをして遊んでいたたりなんかすると、とがった刀の先からビームが発せられているような、異様な感覚がありました。鍼は特に細いので、その感覚が強力です。自分でもびっくりしましたが、鍼を持つと、なんとなくツボが呼んでいるような感覚を覚えるんです。そして、その場所に鍼を置くと、すっと入って、手を離すと鍼が勝手に動きます。少し経つと、鍼が「もう少し入れてくれ」と催促してくるので、また少し入れる。それを繰り返すと、治るんです。凝りがとれると、人は良くなるんだなと、そのとき分かりました。

26 歳の終わり頃には開業して、一日に 100 人ほどの患者さんを診ていましたね。ピンポイントで刺しちゃうから、即症状がとれてみなさん満足して帰られるんです。

その後あれこれ研究を続けながら、症状の大元をたどっていくと、一箇所に行き着いたんです。それは首の下です。ところが、ここを癒すには時間がかかります。そのうちにもう一箇所、腰椎 5 番と仙骨の間にもたどり着きました。それからもう、誰が来ようと、どんな症状だろうと、とにかくそこ一箇所に鍼を刺して帰すだけ。最後はずっとそんな感じでしたね。

山下：

でも、それも対症療法でしかなかったのですよね？

木村先生：

そう、患者さんが口頭で伝える症状しか見ていませんでした。ところが、ある日ショックなことが起こったんです。肝硬変の患者さんがしばらく通院されていました。来院の度に痛みを一発で取ってあげていたのですが、しばらく来院されないなと思っていたら、「あの人が死んだよ」と他の方に言われたんです。そのときのショックは、本当に大きかったです。所詮、患者さんの「命」を見ていなかったんです。

それがきっかけで、いろんな治療法を行脚するようになりました。そして、ある出会いによって人生が完全に変わってしまったんです。

それは、哲学との出会いでした。治療とは、症状とは、人生とは・・・その答えは、カイロプラクティックというフィロソフィの中にあっただけです。B.J.パーマーという人が書いた『グリーンブック』という本を読んだ時、初めて、「ああ、なるほど」と全てがわかったのです。それはもう衝撃的な出会いでした。

その瞬間から、鍼治療を一切辞めて B.J.パーマーが伝えたことをひたすら追試する日々が始まりました。方法論

的に説明すると、「頸椎一番か二番のどちらかをアジャストメント（矯正）するだけですべての病気は治る」というものですが、当時はレントゲン装置もなく、そう簡単には治すことができません。理想を追ってはいたけれど、技術が伴わないのです。そうこうしている間に、元々8,000万円近くもあった年収が、翌年には150万円になってしまいました。

山下：

とはいえ、今までの対症療法が間違っていたことに気づいたので、もはや戻れなかったのですね・・・

木村先生：

そうなんです。名誉や地位、収入を取り戻すのは簡単なことでしたが、それでは魂が満足できなかったんです。「どうしても本当に駄目だった時には辞めちゃえ」という気持ちで、気づけば30歳くらいになっていました。事実、もう辞めようと思ったことは一年に1000回くらいありましたよ。一日3,4回ですから。だって、それまではとにかく自信満々。あれほど「先生、先生」と神様のように崇められていたのが、ゴミのように扱われるようになってしまったんですから。鍼を持てば簡単に治せるんです。でも、完全に封印していました。鍼を使って、患者さんに喜んでもらった瞬間に、自分自身のアイデンティティが崩れることが耐えられなかったんです。

山下：

それは凄まじい精神力ですよ。

木村先生：

とにかくやせ我慢ですね。ある時、私が治療したことによって患者さんの症状が悪化してしまい、三人連続救急車を呼んだことさえあります。その時、担架で運ばれる患者さんから、唾を吐かれました。「治療費だ！こんなところ来るんじゃない！」とお札を投げつけられました。本当に情けなかったですよ。涙が流れて止まりませんでした。その涙が、妙に重たくて温かいんです。ふと鏡を見ると、なんと血が流れ出ていました。眼の毛細血管が切れてたんです。血の涙とはそういうことかと思いました。それほどまでに、完全に追い込まれていました。

山下：

その状況からの復活は、ひとつ飛びだったのですか？あるいは徐々にだったのですか？

木村先生：

徐々にですね。もう本当に辞めようかと思っていた時に、故・福岡正信氏の本、「自然農法わら一本の革命」を読んだんです。「なるほど、分野は違えど、私と同じことを考えている人がいるんだ」と非常に感動しました。そこから精神的に立ち上がることができました。とはいえ、決して使命感ではなくて、ただのやせ我慢。どうしても、内なる治癒力をこの目で確かめたかったのです。

「自然治癒力」という言葉は知っていましたが、B.J.パーマーに出会ってから、それは自分が知っているような軽いものではない、実態はまったく違うのだということが分かったんです。自然治癒力を助ける治療とか、そんなおこがましいものではありません。なぜならそれは、私たち人間の身体を作った力そのものなんですから。その偉大なる力が病気を治すのだから、私たちは、絶対に余計なことをしてはいけません。

山下：

「その力」とは、ひと言で言うとうどういうものでしょうか。

木村先生：

つまり、内なる神。ゴッド、「存在」です。本来私たちは心と肉体が一体であるはずなのに、なぜか離れてしまっ
て病気になります。そして元に戻ると病気が治ります。それがカイロプラクティックの、頸椎一番、二番が肉体
と神を結びつけるという考え方です。この「偉大なる力」を「イネイト」と呼びますが、内なる自然の力、「イン・
ネイチャー (In Nature)」が語源だろうと私は思っています。

カイロプラクティックの場合、頸椎一番、二番の僅かなズレが、全ての病気の原因だと言われます。それより下
の骨がいくら曲がっていてもそれは結果であって、本当は一番上の骨が問題なのだと。そこをアジャストメント
(矯正) するだけでよくて、他はどこも触る必要がないのです。

山下：

その部分を治すことに関しては、いわゆる物理的な治療になるんですよね？

木村先生：

当時はね。でも今は、どこも触らないし刺激もしません。原点はカイロプラクティックのアジャストメントです
が、同時にホメオパシーという学問も研究しました。私は、波動、バイブレーションをなんとなく感じることが
できたので、実際に頸椎を触らなくてももうまくいくんじゃないかと考えたんです。

ホメオパシーの考え方では、薬剤を水で何百倍、何千倍と薄めていって、ある限界を超えると瓶から空気中に薬
剤の波動が飛んでいきます。その波動を身体に近づけたら、頸椎一番が動くのでは？と思ったら、これが大正解
でした。しかし、触らなくても頸椎が動いたんですが、水なのですぐに蒸発して長時間持たないという欠点があ
りました。その後も研究を重ねて、ついにプラスチックの中に波動を閉じこめることに成功しました。それがア
ディオの誕生です。アディオを身体に近づけるだけで脳幹、すなわちイネイトの座が活性化して目覚めます。イ
ネイトが全身に流れ出し、身体の変化が始まるわけです。

山下：

研究の過程は、水の中に何らかの物質をいれて、身体の変化を観るわけですね。

木村先生：

そうです、それをどんどん薄めていくんです。ピペットで物質 0.1cc とって、100cc の水で薄めていくことを
繰り返します。小数点以下のゼロが二桁ずつ増えていきます。最初の物質 0.1cc が千分の一に希釈され、それを
また 0.1cc とって水で希釈して百万分の一・・・と二乗的に薄めていきます。物質は乳酸菌生成エキスから始ま
り、海洋深層水とか、とにかくいろいろ試して、身体が揺れる物質を探しました。

山下：

ホメオパシーのように、ひとつの物質がある症状に働くかどうか、試したのではないのですか？

木村先生：

物質そのものの効果が最大限に達したら、特定の病気や症状を超えて、その人の命が揺れるのではないかと考えたのです。ひとつの症状に対しては、ホメオパシーという学問が確立していますが、そうではなくて、ひとつの薬剤で、すべての病気が癒されるのではないかと思ったんです。脳幹を刺激すればそういう現象が起こるはずだと信じて、脳幹に振動を起こす物質と、最適な薄さを探し続けました。

最初、210 万分の 1 の濃度で動きましたが、まだ弱いものでした。その後もパッパッと動く瞬間がありましたが、徐々に現れる頻度が少なくなってきました。その代わり、効果は大きくなってきているようでした。もうそうになると、薬剤を琵琶湖に一滴、日本海に一滴入れるような世界です。そこまで薄めると薬剤の分子も存在しませんが、その働きだけはしっかりと残って、かつ強力になっていくんです。もちろん水は蒸発してしまうので、やり出したら一日で作らなくてははいけません。

山下：

では、ひとつひとつ、一から繰り返すのですか！？

木村先生：

そうなんです。私もこれはやってられないなと思い始めましたが、その頃には、その波動を身体が覚えてしまっていました。作った物は蒸発してしまっても、自分の身体には記憶が残っていたんです。いつの間にか、身体がすごく敏感になっていて、ある日、秋葉原を歩いていた時にピピッと感じたのが、ある電子部品でした。それを買って波動を転写した結果、うまくいき、オーディオの完成につながったんです。それまでの 10 年間は、何百万円とお金を使って、本当にいろんな実験を繰り返してきましたね。

山下：

実験を繰り返す中で、身体が繊細さを増してきたのですか？

木村先生：

最初は指の筋力変化を確認しながら取り組んでいたんですが、そのうちに敏感になってきたんです。自分自身がセンサーになってしまって、見ただけで反応が来るようになりました。今はもう、患者さんを見ただけで状態や問題が分かります。その頃に培った、いい意味での副作用ですね。

山下：

以前は鍼を持つことによって分かったことが、鍼なしでも分かるようになったわけですね。

木村先生：

結局そのころからずっと続いているんです。かつ、その感覚は研ぎ澄まされてきたんでしょう。元々他の人よりも有利な感覚を持っていたのは確かなようです。その感覚がうまく働いたのが、オーディオを作るときです。もともと波動（バイブレーション）をキャッチする能力があって、ホメオパシーをやってそれに磨きがかかったわけです。最初ホメオパシーに出会ったときは私もびっくりしましたが、目に見えなくても、作用はちゃんとあるんですよ。うちのお弟子さんが歯が痛いというので、その 210 万分の一の水をちょっと飲んでみたらと言ったら、近づけただけで治ったなんてこともありましたよ。

山下：

それは、その方も敏感であることが条件ですか？

木村先生：

いえ、そんなことはないです。誰でも身体は反応しています。たとえ感覚的にとらえることができなくてもです。

山下：

私、本当に鈍感なんです。アディオ・イフもよくわかりませんでした・・・。

木村先生：

でも身体は変化してるんですよ。試してみましょう。山下さんは、体重が右足にかかってますね。立ってみてください。

山下：

体重がどちらにかかっていると意識したことなかったですね。（立ってみる）

木村先生：

ほら、完全に右足で立ってますね。ところがアディオ・イフを使うと、ちゃんと重心が真ん中に戻っていきますよ。とりあえず、現状で指の筋力テストをしてみましょう。はい、開きますね。じゃあちょっと体重を左にかけてみてください。ぐっと。それくらい。そこが真ん中です。

山下：

え？こんなに左に体重かけるんですか？

木村先生：

そう、そこが正しい位置ですよ。指の筋力を見てみましょう。ほら。硬いですね。

山下：

え——！ここが中心？？私、普段めっちゃくちゃ傾いてるんですか？？全然だめじゃないですか！

木村先生：

そういうことですね。じゃあ、普段の状態に戻って・・・。アディオ・イフを近づけてみましょう。身体が中心に入っていきます。首にかけてみますね。

山下：

わからないですけど、動いてますか・・・？

木村先生：

もう変化してますよ。指の筋力を見てみると？・・・ね、硬いですね。アディオを外すと、ほら戻った。再現性があるので、何度やっても動きます。5秒かかってませんね。2秒くらいで動いてますよ。

山下：

動いてますか・・・。う～ん、・・・明日から真面目につけます。

木村先生：

ははは(笑)。脳は全部知っているんですよ。アディオ・イフが治すわけではなくて、イネイトが目覚めるだけのことです。アディオ・イフを近づけることで、イネイトが目を覚まして、本来の自分に近づこうとし始めるんです。そして状態の悪いところを治すために、悪いところに自分の力を集中していくんですよ。だからアディオ・イフは、ただのきっかけなんです。本当に治しているのは、自分の力（＝イネイト）にほかなりません。

山下：

なるほど・・・。触媒みたいなものですね。

木村先生：

そう、治療というのは触媒ですよ。治療家や道具が治すのではなく、本当は内なる自分の力が治していくんです。それが B.J.パーマーの考え方で、本当に奇跡的なことが起こります。それとホメオパシーとが融合したのが、むつつ整体です。

山下：

以前、たまたまお客様の電話をとったのが、アディオ・イフのご相談だったんです。「元から繊細な体質ではあるんですが、アディオをつけてから、今まで通ってた道が苦しくて通れなくなったり、スーパーで手にしたトマトが手の中で融けちゃうんです」というお話をされたお客様がいらっしゃるんです。それで、「すみません、私は本当に鈍感で感じないんですが、アディオに関してはいろんな変化が起こっていることは聞いています」とお返事したんですけど、一体どういうことなのでしょうね。

木村先生：

なるほど、いろんな報告がありますね。よく耳にするのが、「アディオ・イフをするようになってから、つけていた指輪が曲がってしまった」という例ですね。結構な人数いらっしゃって、捻れてしまった指輪を見せてもらったこともあります。どうやら、嫌なものはぐにやっとなっちゃうみたいです。私たちの身体が。

山下：

アディオが捻っちゃうんじゃないくて、身体がやっちゃってるんですね・・・！？すごいですね、私たちの体って・・・。

木村先生：

不思議ですよ。詳しいことは、私も全然わかりませんよ。私はただ、脳幹と共鳴させる道具を作っただけであ

って、あとは神様がやっていることですから。

山下：

整体院の治療には、市販のアディオ・イフよりも大きなものを使われるのですよね。

木村先生：

そうです。8年前からは、スーパーアディオ研究会（現 イネイト健康法実践研究会）という NPO 法人を作って会員制のボランティア活動もしています。整体院で使っているのと同じ波動具を使って、自分の家族や周りの人を癒してあげてくださいという趣旨で、会員数はすでに 3,000 人を超えています。この人数には、治療家としてお金をとって治療をする人たちは含んでいません。当初はまさかそんな人数になるとは思いもしませんでしたが、まだまだ増えていっていますよ。

山下：

患者さん達からの要望があって作られた団体なのですか？

木村先生：

今では全国に少しずつ整体院やサロンも増えていますが、当時は一箇所しかありませんでしたから、「先生のところは遠くて」という遠方の患者さん達からの声に応えるために始めました。いまだに、例えば北海道だと、札幌の整体院に通院するのは一日がかりという方もやっぱりいらっしゃいます。あるいは病院のベッドに寝たきりだったり、全くお金がない人もいたりします。その状況を何とかしようと、治療家が使う道具をみんなに渡したいという気持ちで作り続け、一年くらいかけて配布できる道具ができあがりました。

山下：

本当に素晴らしい取り組みですね。

木村先生：

当時、みんなからはすいぶん反対されましたよ(笑)。そんな道具を配ったら、患者さんが整体院に来なくなるよって。でも、そんなこと絶対にないと言いました。なぜかという、認知されることがまず最初ですから。当時、鍼灸といえば 10 人中 8 人くらいの方が知っていました。カイロプラクティックは？と聞くと、「ああ、あの背骨ボキボキするやつね」と半分くらいの方がわかる。では、「むつう整体って知ってる？」となると、誰も知らないですよ。せめてカイロプラクティックくらいの認知度になれば、患者さんの数が相当底上げされます。そういう現象が起これば素晴らしいと思ったんです。

さらに、今は、我々が「癒し人」と呼ぶ人たちを増やす活動を始めています。癒し人とは、道具も何も使わずに「想いの力」で人を癒せる人のことです。「人間本来の力ってすごいんだよ。本当はアディオなんかもいらんんだよ」ということを伝えられる人たちです。

山下：

癒す力は、本来みんなに備わってるのですか？

木村先生：

そう、みんなです。ただ私は、後生の人は知らされなくなっていることを再発見しているだけです。例えば、左手の中指には、整形外科的症候を治療する力があるんですよ。患部に向かって、左手中指を向けると痛みが取れたり症状が改善します。そういったみんなが持っている力を、体系化したんです。ある程度の訓練は必要ですが、癒し人が 100 人、1000 人、1 万人と増えていけば、日本の医療は大きく変わってくると思います。とても盛り上がってきていて、今の私の活動の軸は、癒し人の養成なんです。

山下：

すると、治療から、指導という次のステージに進まれたわけですね。

木村先生：

もちろん臨床は続けていきますが、軸足は変わっていますね。想いだけでも治るんですよ。想いだけで痛みは消えるし、想いだけで脳幹はちゃんと共鳴を起こします。それは私だからではなく、ちゃんと訓練したら誰にでもできることなんです

山下：

誰でも、真の健康に導くためのすばらしい力が備わっているんですね。

では、その真の健康を得るために、ひとりひとりが心がけるべきことは何でしょうか？

木村先生：

情報過多から脱出すべきです。目新しい情報に飛びつくのではなく、自分の内なる力がすべてだと分かれば、あとはこれ以上むやみに情報を入れない方がいい。私たちがこの世に生まれたのも、こうして毎日生きているのも、傷や病気が治るのも、すべては内側の力でしかなく、特効薬や魔法なんかは存在しないんです。そもそも、生きていることこそが魔法です。それに目を向けるには、雑音を消さなければならないし、情報過多から逃れなければなりません。

山下：

内側の力を感じとれないから何かを足そうとするのではなく、弊害になっているものを取り除いていくことが必要なんです。

木村先生：

そう、引き算です。

山下：

おそらく、私たちの多くは、注意関心が本当に自分自身には向いていないんでしょうね。「自分の身体が」といいながらも、外に外に、何かの特効薬を求めているような状態で。

木村先生：

その通りですね。それに、たとえ自分に向いているとしても、症状にしか目が向かないでしょう。その症状というのは、決して原因ではないんですよ。何か身体にとって悪い行いをしたら、必ず何かの症状が現れます。それでいいんです。問題なのは、その症状が悪いんだと思ってしまうことです。食べ過ぎたら胃が重くていいし、睡眠不足なら眠たくていい、お酒を飲み過ぎたら肝臓の数値が悪くなったっておかしくないわけですし、酔っぱらっていいんです。ところがそれらでさえも、症状は悪だと考えた瞬間から、私たちは健康を害し始めるんです。

ですから、症状は善だという考え方に変える必要があります。由って来たる処の理由を見つけなければならないのです。「今、あなたの症状というのは、あなたの内側からの警告ですよ。あるいは今のあなたの状態を教えてくれているんですよ。あるいは、センサーが正常に働いている状態なんですよ」とか、いろんな意味があるんですよ。悪いことなんて何もないんです。症状は善なんです。そこを取り違えてしまうことこそが、悪なんです。

患者さんも然りです。「ここしばらく、どうでしたか？」と聞くと、具合の悪いところばかりを、ザー——と挙げるんですが、本当はいいところから話さなきゃいけない。いいところに目を向け始めると必ず身体は良くなっていくんです。皆さん自分で自分を傷つけています、それこそが、その人の病気なんですよ。

山下：

なるほど……。そういう状態も、その人の病気なんですね。

木村先生：

それさえも、イネイトに働きかけ続けると治ってきます。そう考えるとイネイトって本当にすごいですよ。イネイトの流れをよりスムーズにするためには、自分の心が大事です。「病気の本体は、症状は何か」と客観的に見る習慣がないと、いつも症状に振り回されてしまいます。必ず理由があるんですから。

脳腫瘍なんかがあると頭痛が辛いです。市販の頭痛薬を飲んで治まっていたところが、この整体院に来ると猛烈に頭が痛くなります。それは、イネイトだけではどうしようもない、人為的なオペレーションが必要な段階だということを教えてくれているんです。精密検査が必要ですよという警告が出ている状態なのに、頭痛薬でしのごうとするんです。結局、そうやって逃げているですよ。この症状さえ、痛みさえとれたらと。自分のこれまでの生活に対する責任はとうとうとしません。でも、その姿勢が病気で、そのことに気づくことが重要なんです。治癒するのは本当の気づきがない限り起こらないのですから。

この整体院に来院されると、たとえば胃潰瘍がなくなったりします。でも、そこで気づきが起こらないとどうしようもないんです。「それはあなたの力が治したんですよ」という気づき、「その症状は生活の結果ですよ」という気づきがないと完治はしません。「ここへ来ると、胃潰瘍が治るんだよね。ぎっくり腰が治るんだよね」で終わってしまう方は、残念ながら必ずまた同じ症状を繰り返します。

「私たちが何かあなたの身体にしましたか？何もしないでしょ？」ということは、あなた自身が治したんですよ」と常々申し上げるんですが、その方がそれに本当に気づいたときに、初めて本当の治癒が起こります。「そうなんですね、私の内側の力なんですね」とご自身の言葉で発したときに、イネイトが強力に安定するんですよ。

山下：

だから、「最初に、気づきありき」なんですね。

木村先生：

気づきという点で面白いことがありますよ。例えば股関節が硬い患者さんも、治療をすると左右同じようにあぐらがかけられるようになります。ところがそこに砂糖を乗せると、また元に戻っちゃいます。身体が、元の硬さに戻すことによって気づかせるんです。やめてくれと。ところがそこでね、「わかりました。じゃ、私砂糖をやめます」と決意した人は、もう一度砂糖を乗せても、もう戻らないんです。決意した瞬間から症状がとれるんですから不思議ですよ。

山下：

ええ？

木村先生：

つまり、決意することが大事。気がついて、決意した瞬間から、砂糖を切り離すことができます。だから気づくだけではなくて、本当にやめようと、決意しないといけないんですね。その方が甘い物によって増悪していたものが、決意した瞬間に砂糖のじゃまがなくなるんです。正座ができるようになったり、階段の上り下りが楽になったり。だから、すべては内側の力なんですよ。

山下：

内側の力に気づかせ、決意させるのが先生の治療方法なのですね。

木村先生：

とにかく原因療法と対症療法は違うんです。イネイトが内側から外側に向かって流れ、気が上から下に降りるのが原因療法、外側から何か力や刺激（薬など）を加えることで、気が下から上にのぼるのが対症療法です。イネイトの流れは英語で言うと Avohe Down Inside Out、頭文字を取ってアディオ（ADIO）になるわけです。ところがその反対で対症療法は、Outside Inside Below Up、オイブ（OIBU）です。症状に苦しむ患者さんを一瞬にして黙らせることができるのは、オイブ（つまり対症療法）です。その代わり、イネイトの流れを止め、「命」を細くします。だからこそ、アディオで、長く見守らないといけないんです。

山下：

オイブは、身体を甘やかしちゃうということでしょうか。

木村先生：

そう、すごく過保護です。そして刹那的です。あれこれいわなくても症状をとってしまいますから、患者さんはいくらでも来ますが本当に健康にはなりません。

山下：

あの先生のところに行くと楽になるからと、習慣になってしまうんですね。

木村先生：

そうそう。でも、だめなんです。面倒くさくてもイネイトがどうだとか説明をして原因療法をやった方が、その人の健康を害しませんからね。人間の力が一番すごいんです。それを伝えて気づいてもらうことが一番大切なんです。人間というのは、とにかく人智を評価しますが、本当にすごいのはイネイト、自然の力です。太陽や空気なんかがなかったら大変なのに、そこに感謝する人はあまりいませんよね。

山下：

あって然るべきという感がありますね。

木村先生：

そう、あまりに当たり前すぎてね。請求書も来ないし。ところが、たとえば人間が考えた電気は便利でしょ。でも請求書が毎月来るから、電気は有り難いと思う。本来電気はイネイトと似ています。イネイトも電気も目に見えないし、においもカタチもない。でも働きがあります。イネイトが目にいけば目が見え、耳にいけば音が聞こえ、舌にいけば味が分かり、心臓にいけば鼓動を打ってくれる。でもあまりに当たり前すぎて、イネイトには誰も感謝しないんです。もちろん、請求書も来ませんし。

でも、本当に大事なものは、電気じゃなくてイネイトです。なくては一秒も生きてはいけません。我々が生きていることもイネイトです。それが分かったから、もう鍼を持ってないんです。人智の反対である天智にお任せしないとイケないんです。我々の内側にある叡智をイネイトと言っていますが、厳密には違います。イネイト・インテリジェンスに、肉体が埋まっているだけのことです。つまり、叡智の中に、働きの中に、力の中に、我々の肉体が棲んでいるんです。私たちの目に見える肉体が一番内側であり、その周りにイネイトの影響範囲があります。自分の近くに嫌な人が来ると察知するでしょ。そこも、イネイトの範囲内なんです。と、私は解釈しています。

山下：

肉体を持って生きていると思っていても、自然の力によって生かされているんですね。

木村先生：

教育は、真実を伝えないといけません。ところが、我々が五感でとらえることのできる事実の先に真実があるにもかかわらず、真実を教えていないんです。命とは、心臓やその他の器官をくっつけてできているわけじゃないですよ。ところが、まるでそんな風に思ってしまうような教育を、私たちは受けてきてしまったんです。細分化して、再統合して。でもそれは絶対に無理です。そうやって細切れにしたって、絶対に命は見えてきません。一部が全体であり、全体が一部なんですから、そこに垣根はないんです。私たちの体にしても、大部分が空間からできているものが、圧縮して見えているだけの錯覚です。我々は、視覚を通してしか認識できないからです。目だって、赤外線から紫外線の間しか見えてないんですから。

山下：

極めて限定された情報だけをキャッチしているんですからね。

木村先生：

だから、生かされていると思わずに、生きていると思ってしまうんです。それに気づくためには、まず自分自身

に目をむけることです。「ああ、甘いもの食べ過ぎてたからなんだ、じゃあ明日からやめます」といったような低いレベルの気づきからでいいんです。そういう小さな気づきを積み重ねていくと、最後に、やっぱりイネイトによって生かされているということに気がつくんです。そこまで行き着くと、今度は簡単には病気をしなくなります。結局、病気は固定観念の現れでしかなく、正しいことに気がつく、病気は治るんです。事実ではなく、真実に気がついたときに。私がそういったことを話して、それに気づくと、その人は治療が始まっていくんです。今、姿勢どうなったと思います？ほら、立ってみて下さい。

山下：

今ですか・・・？あら！！（右に傾かず、まっすぐ立ってます！）

木村先生：

今、気づいているんですよ。私がしゃべってきたことに、「うん、そうだわ」と共感したから。そしてそれが真実だから。真実には力があるから、人を変化させるんです。

山下：

先生の話、「その通りだわ」と頭で考えて、姿勢を正そうと思ったわけではなく、体が勝手に反応したんですか？

木村先生：

そう、イネイトが感じているんです。だから、正しいことをいうということはすごく大切なんです。

山下：

ということは、先生は、相手が、先生の話ちゃんと理解したかどうかが見えちゃうんですね！

木村先生：

そうそう、見えてますから。

山下：

よかった・・・、ちゃんと体が反応してて！

「うん、うん」って頷きながら反応してなかったら洒落になりませんね！こわいこわい！

木村先生：

ははははは！（笑）

だから真実に気づくことがすごく重要なのです。「そうか、なるほど」と気づいた瞬間から、人は変わっていきます。そうやって、固定観念をひとつずつ取り払っていくと、人って健康になれるんですよ。結局先入観や固定観念って、いつ植えつけられたかという、人の言葉が理解されたときです。言われた言葉の意味が分かったとき、自分が否定されたときに、大人にいい顔をし始めます。無邪気さがなくなると、イネイトが止まります。

つまり教育です。正しい教育と悪い教育ってそこなんですよ。塾といえば昔は、学校の勉強についていけない子供が学ぶところだったのが、今は友達とどれだけ差別化できるかという競争の場になっています。もはやイネイ

トじゃない。そんな渦の中に入ってきた子供が、イネイトになれると思いますか？無理ですよ。

だから今、日本も世界も変なんです。自分たちの利益のために生きていれば、テロや戦争が起こるのは当然。なぜならそれは真理になっていないから。目の前のリンゴを4つに割って、大きいのを取ったら得したような気がするの事実だけど、最初に小さいのを取ってみんなが喜んでくれたら、それが真実です。なぜなら心が動くから。感謝と尊敬が生まれます。ところが、最初に大きいのを取っちゃったら、尊敬も何も起こらないですからね。憎しみしか起こらない。まさしく戦争状態、みんなが不幸になります。最初小さいのをとれば、みんなが喜ぶ。すなわち、与えた方が勝ち。それが大事です。

こんな話を聞いた後、みんな痛いところが治まったとかいうのは、真実に気がつくからなんです。「なぜ私の手が上がるようになったんですか？」と聞かれると、「それはあなたが気がついたからです。気づくことでイネイトが流れたからです」と説明します。これは催眠でも何でもなくて、つまり固定観念がイネイトの流れを止めていたんです。

山下：

最初は、何らかの症状を解消したくていらっしゃるけれども、治療によって、最終的に本来の人間らしさに戻れるとでもいいですか・・・？

木村先生：

そう。真実に気づくということはすごく大事なことです。病気に関しては、イネイトが治しているということだけです。手術の腕がいいとかはその次の話。医者を尊敬する前にまず、イネイトを尊敬し、畏敬の念を持たないといけない。実はとても簡単なことなんです。子供が遊ぶように、人が食事をするように、癒しなんてものもとても簡単なんです。夫が妻を、妻が夫を、親が子供を、子供が親を、誰でも癒せるんです。ところがいつのまにか、白衣を着た偉い先生が治す人、あなた方は治される人という関係の図式ができちゃってることがすでに真実じゃないんです。真実は、誰でも治せるということ。もちろん医者や医療機器は必要ですよ。でも、一番大事なものはプライマリーケア、初期医療です。だから、日本中が、初期医療に通じた癒し人だらけになる日のために、精一杯邁進しているわけです。

山下：

先生がご指導されるときに心がけていらっしゃることは？

木村先生：

みなさん、何かのスキルを獲得したいと思って来られるので、それを否定します。そうじゃないんだと。新しい船を建造すると、最初は設定したスピードが出せますが、半年一年とずっと航海しているとだんだん速度が落ちてきますね。船底に、フジツボやわかめがくっついてくるからです。つまり、今の私たちの状態がそれです。癒し人になるということは、フジツボやわかめである固定観念をとることです。本来のイネイトのあるがままの状態に戻すだけなんです。だから、能力を獲得するんじゃなくて、捨てていだけなんです。

自分たちが関わって人の笑顔を見ることができると、感動がやって来ます。本当の幸せとは、そういうものです。つまり利他です。これを最初に強引にやっていくんです。利他は、大いなる利己につながるんですよ。不思議なんです。癒し人は、人の病気を癒すことで自分の健康も保証されます。その癒しのワールドに自分自身も入ってしまうのです。人を治療しながら自分を治療することになりますから、つまり利他＝大いなる利己な

んです。毎日利他をやっていると、イネイトが流れっぱなしになります。

山下：

よく、マッサージや治療される方は、逆に受けてしまうと聞きますが逆なんですね？

木村先生：

そうです、絶対に受けません。むしろ癒されます。患者さんを診るたびにどんどん元気になります。人のためにやることで、悪いものを受けるはずがないんです。そこに人智が入ると受けてしまうんですが、我々は自分の意思が何も入っていませんから、みんな健康になります。イネイトは光ですから、闇を扱わないし、意識してないので闇が来ないんです。でも、対症療法をやると、相対の世界に入って感謝がなくなって、どんどん暗くなります。そういう世界から脱することができて、本当に嬉しいですね。毎日ワクワクして楽しいし、分かち合える仲間も日々増えていっています。幸せのネズミ講です。

山下：

幸せのネズミ講、いいですね！そうすると、最後に一番得をするのは？

木村先生：

・・・ははは（笑）、親分のわたしです。やっぱり利他＝大いなる利己に尽きますね！

山下：

木村先生、お忙しい中本当にありがとうございました！